

2011年(平成23年)10月20日 木曜日 享月 日 業斤

5

耕論 街に出る人たち

オピニオン



コラージュ・宮下洋輔 / The Asahi Shimbun

政治家と国民の関係

消費税を含めた負担の構造改革。これは必須の課題です。しかし、こればかり必死ととられかねない政権の姿勢には危機感を感じています。信頼する若手数名で、夜逃かに総理公邸を訪ねたのは12月上旬。2時間を頂いての必死の説得。まず国会議員が身を削るのが先。次は公務員。国民負担は最後の最後に国民にご相談すべき事柄。党内には行革調査会が設置され、総理も議員定数削減や、公務員人件費の削減に、並々ならぬ決意を示して頂きました。しかし、もはや“嘘つき政党”とまで言われている民主党です。本当に嘘つきのまき終わるか。最終最後、自分たち自身を追い込んで、少しでも大きな成果に7なげらるか。本当に瀬戸際、背水の陣の2012年です。政治家と国民の関係。そのものの変革は、今後の日本、そして世界を睨んで、とても大きな鍵となります。特に昨年来、原発問題に肉連に、国内でも大きな論議、そして“行動する国民”が報じられました。この点についてインタビューに来られたのは、刀祢館さんでした。

政治家も問いかけたい

朝日新聞(2011年10月20日付)より



おがわ じゅんや
小川 淳也さん
民主党衆議院議員

71年高松市生まれ。旧自治省官僚から衆院選に立候補、2005年に初当選。鳩山・菅両内閣で総務政務官。民主党香川県連副代表。当選2回。

沖縄県庁に自治省から出向していた1995年、米兵による少女暴行事件に抗議する県民総決起集会があり、妻と参加しました。8万人を超える人たちの中で、人々の訴える力を実感したことを覚えています。今回「脱原発を掲げ、たくさんの方が街に出た。政治家としてどう受け止めるかですか。私は政治全体として歓迎すべきだと答えます。想定された答えとは違うかもしれませんが。

日本では国民は政治家に「求め、やってもらう」、政治家は国民に「求められ、やってあげる」、そういう関係が続いていました。全体のパイが大きくなつていく時代にはそれが成り立ちました。もう望みません。何かを求めるなら何かを負う、あるいは断念する。そうではないと国が成り立ちません。これから何十年と生きていくことが想定される一人として、私や私の世代は日本が向き合う

問題の大きさと重さを肌で感じています。経済問題も環境問題も、原発・エネルギー問題も、世界的に変革を求められている。答えは、まだありません。市民にはどんどん意思表示し、参画してほしい。それがより高次元の要求なのか、それがより未来につながる要求なのか。デモをする人たちも考え、判断してほしい。

同時に、政治家からも人々に問いかけていく必要がありま。要求するということは責任が伴いますよ、失うものもありますよ、その覚悟なり用意なりはありますか、私たちと一緒に考えませんか、と。つまり対話です。難しい時代だからこそ対話でやっていく。そこから政治家との新しい関係、共同作業が生まれるのではないのでしょうか。政府と市民の間に、かつての

より大きな問題や課題を背負っていかねばならないこの日本で、より多くの人たちが意見を表明し、参画の機会を広げていく。ただし、その分、責任も一緒に背負ってもらう。そういう国家運営を考えざるを得ないと思うんですね。だから、私は多くの人たちが意思表示することに希望を感じるのでしよう。意見や要求の発露に未来への光を感じます。(聞き手・刀祢館正明)